

草紙御玩具などの懐しく享し初轉法輪の跡なりと聞く庫裡大上人が御師範道善坊の御墓旭ヶ森血染の笠生身の宗祖に逢ひ奉るの感なき能く麗迄は僅か三十分餘にして下りそれより馬車を驅て勝浦に至り汽車にて藻原山に至る本堂の開扉後寶物未曾有戒檀の御本尊等を拜す再び汽車中の人となりし時は五時頃兩國に着せし時は八時過ぎ別院に歸りまた自由の時間に入る。

### 三十日 (晴)

四時半起床は昨日に同じ朝勤を終りて午前は上野公園芝増上寺宗務院四十七士の泉岳寺と見物して品川より大崎に向ふ大崎大學學生諸君の出迎を受け講堂にて讀經後同窓會より厚き待遇を受く又山梨學友會諸君から茶話會を催された東西相呼應して起つべき法器何となくに慕しく二時間餘りの教室に語り晝飯の饗應を受けて多摩の河畔宗祖御入滅の靈地地上本門寺に指す本堂御開帳靈寶拜觀それより大上人の茶毘場宗仲夫妻の御墓等を拜して直に堀之内に向ふ限りある時間忙しき事甚し妙法寺に着きたる時すでに五時半御開扉後當處檀林生諸君の心ゆく計りの饗應を受けて此處を辭し新宿にて十時半飯田町に集合すべき約な

なして各自自由行動を取る十一時の夜行にて見送の人々に別れを告げ東都を後に懐しき御山に向ふ。

### 三十一日 (晴)

車中甚だ愉快に午前五時半甲府着直に伊勢町なる遠光寺に至り朝飯を頂き少憩して八時馬車二臺に分乗して青柳に之を捨て昌福寺にて茶菓中食の馳走を受く歸途小室山に詣すべき豫定の處あまりに疲れの爲め歐澤より船にて波木井に來り日暮れ御山に着祖堂前にて宗祖に無事歸山を告げ分れて各自の部屋に入る歡聲院内に充ち二三日は旅行中の感想談失敗談等絶へざりき。

### (i H 生)

## 同窓會記事

一四月二十四日第二回總會を開く、議長に龜口教授を副議長に小林教授を推す。

始めに幹事の會計報告あり、次に決議、其の結果下の如し。

(イ) 耕籍會從來一周一回の處、今後二回と改正する事之れは満場一致可決。

(ロ) 雜誌發行回数減縮案は現在の財政に鑑みて減縮と決す。(年四回の所年二回と)

(ハ) 弓術部新設案は之れ亦財政上止むを得ず懸案となし置く事。

(ニ) 茶話會の回数に付て之れは都合上年五回(降誕會、開宗會、卒業生送別會、龍口法難會、天皇節祝賀會)に限りて會計負擔とし他は臨時會費を徴收して行ふ事と決定。

(ホ) 會則第十一條の中途退院者に對する送別會は之れを紀念品を贈呈する事と改め二ヶ年以上在會したる者に限ると改正す。

(ヘ) 高等部四年級生に幹事被選舉權を與へよとの議案は不讀者ありし爲め否決せられたり。已上

一四月學院教授中に更迭ありし爲め各部々長亦左の如く更迭す、會則に依り幹事亦更代す。

會計監督	龜口教授	同幹事	丸山勝龍
文學部々長	吉田教授	同幹事	望月本啓
講演部々長	吉田教授	同幹事	森 亮遠
運動部々長	田附教授	同幹事	泉 義敬
新任教頭閣下	を副會長に仰ぐ		

## 文學部

一會員諸賢は先年大會に於て雜誌發行回數を

減じたるを以て雑誌「栖神」は紙數に限りあれば原稿多きに失し悉く載せ能はざるべしと思惟せられてか、非常に投稿を遠慮せられたるやの感あり其の爲め發行期の來るにも關はらず編輯する事能はず、部長の非常なる盡力によりて漸く茲に發行するを得たり、悲しむ可き現象と言はざるべからず、會員諸賢よ！大正の今日三寸の舌頭を以て衆生を導く誠に可なり、されど文明利器たる活字を以て、天下に大振伏を行ふ亦快ならざるや諸賢試に思へ、聖祖上人は御口を御筆と其の執れに、偏し給ひしか否かを、余輩今多く言ふの必要なかるべし、諸賢よ！願くは原稿多きに失すなごの顧慮を止めて次號には大いに振て御投稿せられむ事。

## ■運動部

一 當部は昨年の大會に於いて大いに發展する様にと思ふて部長以下會員は熱心に擴張を説いたけれ共財政上止むを得ず現状維持と云ふ事にはなつたが、會員の此の熱心は終に自ら歟を執り鎌を握らしめて運動場の修繕を施すに至らしめた、爲めにどうやら運

動場らしくはなつたがまだ十分と言ふ事は能きない、今春の大會には是非共弓術部の設備をせねばならぬと會員諸君が力むで居るのも無理からぬ事である。

一 大正四年五月二十七日より五日三泊の豫定にて房總靈跡參拜を目的として修學旅行を行ふ（旅行記事は別に録す）

一同十月十六日より二泊三日間の豫定にて甲府市中心の道路布教に兼ねて御嶽探勝を目的として修學旅行を行ふ（同記事は別に録す）

## ■講演部

一 大正三年度の大會を経た我が講演部は急に面目を一新して、活躍する様になつた。小林島田等の前部長の出色の稱あつた我が講演部は大正四年度の大會を経て更に具體的の發達を示す様になつた、從來一週一回の練磨演説では到底會員の野心を満す事が出来なかつた。之れを回数に倍さんが爲め毎週水土兩日を以て確實に練磨する様になつて會員は殆んど常に當直辯士として逐ひ立てられる様な具合である、新しい藤田部長が其の都度叮嚀な批評があつて會員の進歩

は目に見る様である、そして從前から我が祖山の特色としてある幻燈布教なども機會毎に絶へず實地練磨の功積んで居る、そしてもう一つ特報すべきは去る大會後毎朝の祖師堂説教や山内各坊の終日説教は之れを講演部の管轄となし當直を定めて各實地練習場とした事である其れて以前は自分は口の人でないなど言ふて居た連中も此の頃では類りに其の當直の來るを待つ様になつた、是れ等は發達の中に特に著しいものであらう、三部の中では何と言つても當部は本職であるそれだけに會員の努力も眞面目である。

一 建宗會例年の如く四月二十八日各級總代演説。

一 釋尊降誕會無慮數千の參詣者年中行事中第一たるは普く人の知る處五月七日幻燈會を開く。

一 開闢會六月十七日幻燈會を開く。

一 勝浦の布教別記の如く五月修學旅行の途千葉縣勝浦町本行寺にて一行の午餐中同地信徒の爲めに同寺境内の青葉涼しき所は我等が布教場とはなれり森幹事の開會の辭に引

き續いて伊藤海聞君の地方の風教、藤田部長の本佛の慈光と題する演説に多大の感動を與へたり。

一龍口法難紀念會 中等部階下教室にて各級總代演説を行ふ。

一會式 十月十二日午後より通夜説教及宗祖御一代幻燈を行ふ幻燈説明は岡、今村、松本、森、溝田、伊藤、の諸君説教は丸山、伊藤、部長、小野、溝田、山内、早川、黒藪、泉、等の諸君であつた、

一本妙臨師追慕會 舊曆九月十六日は第九十二回正當なるを以て醒悟園にて説教及幻燈受持は中等部五年生全部にて。

一御大典奉祝會 千歳一遇の御大典を紀念せむ爲め本會にては教場裝飾【(一)湊川橋公父子(二)宗祖伊勢神宮參拜之圖(三)東海道名所(東京―京都)】(四)列人物(五)方言録(六)選書、此の外階段にまたがりたる天狗と通勤生控所の太平獅子共に參觀者に一驚を與へた】選書展覽餘興等あり、

又玄關前には中一生が非常なる苦心と勞力にてなれる線門あり、其の額及周圍の意匠には何人も驚歎し其の技巧には何人も難

も稱讃の聲を惜まなかつた。午後一時よりは大客殿に於て講演會を行ふ。

開會之辭 幹 事

國家と宗教 田 附 教授

國民の自覺 藤 田 教授

聖訓と勸語 吉 田 教授

我が國休 龜 口 教授

奉祝に就て 森 田 教授

一日蓮宗大學教授柴田一能師は舊師堀日溫師遷化の爲め來延せられしを機とし十月一日大客殿に於て一場の講話を請ふ。師は吉田教授の紹介によりて壇上に顯れ約一時間に亘る問答會の爲めに有益なる講演をせられた。茲に謹んで其の勞を謝す。

雪 中 竹

森 亮 遠

ゆふまくれ絶てしつれの音もなし

雪しつかなるにはのくれたけ

## 本會特別寄附金品

一金壹圓也 志村要麒殿

一金壹圓也 服部霞山殿

一金壹圓也 坂本海亮殿

一金五拾錢也 遠藤日照殿

一金五拾錢也 吉橋日耀殿

一金五拾錢也 神山日達殿

一金五拾錢也 鈴木文海殿

一金五拾錢也 矢崎玄英殿

一金五拾錢也 山内察祥殿

一大崎學報(每號) 日宗大學殿

一臘伐尼圖(每號) 天台宗中學殿

一唯一雜誌(每號) 日宗唯一青年團殿

一天 鼓(每號) 天 鼓 社殿

一戰友文武(每號) 荒木經明殿

一天晴會講演錄第三輯 柴田一能殿

一統合講演錄 柴田一能殿

一文 底 文 底 社殿